

活動報告

多文化共生研究所ランチセミナー（2018年度第1回）

「アラブ世界で最も古い歴史をもつ王国 モロッコ」

愛知県立大学外国語学部 ヨーロッパ学科フランス語圏専攻講師
白谷 望

本ランチセミナーでは、発表者が研究対象としているモロッコと、近年取り組んでいる研究の概要を紹介した。

はじめに、複数の写真を使用してモロッコの基礎的な情報を示し、その中でも地理的特徴に焦点を当てて紹介した。アフリカ大陸の北西端に位置するモロッコは、国土の西側は大西洋に、北側は地中海に面しており、その南側にはサハラ砂漠が横断している。つまりモロッコは、アラブ・イスラーム地域の一部であると同時に、地中海世界及びアフリカ世界の一員でもある。

こうした地理的な特徴からは、以下3つの解説を行った。まず、モロッコの北東部に位置する古代ローマのヴォルビリス遺跡である。ヴォルビリスは、北アフリカにおける古代ローマ都市の中で、最良の保存状態を誇る遺跡のひとつとして、ユネスコの世界遺産に登録されており、歴史的にも地中海の北側世界と密接な関係があったことがわかる。次いで、モロッコと隣接するスペインの飛び地であるセウタとメリーリャである。両都市からは、1日に何便もの高速船が、ジブラルタル海峡を越えたスペイン本土を往復して

いる。そのため、モロッコはアフリカ大陸からヨーロッパ大陸へ渡る玄関口となっており、その中でもセウタとメリーリャは、アフリカ大陸にしながら陸路でスペインへ入ることの出来る地として、モロッコ人だけでなく、サブサハラ諸国から多くの移民が押し寄せる場所となっている。続いて、モロッコの主要産業である農業と水産業を紹介した。アラブ世界は、国土の多くを砂漠に覆われており、水資源に乏しい乾燥した地域だと思われることが多い。しかし、国土の北側と西側が海に面しているモロッコは水産業が盛んで、毎日多くの種類の魚が水揚げされている。日本との関係で言えば、日本のタコの輸入元第1位がモロッコとなっている。また、地中海性気候を活かした農業も活発で、国民の半数近くが従事しており、多くの農作物が欧州諸国に輸出されている。

今回のセミナーをきっかけに、1人でもモロッコやその周辺地域に関心を持つ人が増えれば幸いである。

